
ふたりの距離

天原ちづる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたりの距離

【Nコード】

N9855B

【作者名】

天原ちづる

【あらすじ】

面倒くさがりのクセに面倒見のよいオンナノコと、美形なのにヘタレで地味くさいオトコノコのお話。ふたりそれぞれの視点で書かれています。

代価はアイスキャンデー 1本分

暑い。

何せ真夏だ。こんな暑い日はさ、面倒なこと、したくないんだよね。なのにさ、なーんであたしは、他人の相談なんかにつってるんでしようね。

あーあ、面倒くさい。

「そういうことは、お願いだから心の中で言つてよ、睦さん」
ガツクリとした様子で、ヤスがあたしを見上げる。

「なに言つてんだか。別れたからって、毎度毎度人ンとこに来ないでよね。モテ男のクセに」

あたしはというと、リビングのソファにふんぞり返つたまま、フロアリングの床に直に座つててイイ位置にあるヤスの頭をひっぱいた。

ヤスこと新庄泰伸しんじょうたいのぶはモテる。半端なくモテる。

理由は至極簡単。顔がとてつもなくイイからだ。

サラサラの髪は生まれつき色素が薄くて、キレイな栗色をしてるし、顔のパーツは理想的な位置に収まってて、しかもその一つ一つが魅力的だ。

こげ茶の瞳はまるで貴石のようで、すつと通つた鼻筋に、薄すぎず厚すぎない桜色の唇。肌も悔しいことにスベスベしてやがる。いわゆる白磁の肌つてヤツだ。

けっ、男のクセに。

ちなみにスタイルもイイ。身長は確か175くらいだったか。特に高いワケでもないんだけど、手足が長い上に、バランスもイイから、どんな服を着させても、さらりと着こなしてしまうのだ。

ダサイ小豆色の学校指定ジャージでさえも、ヤスが着るとブランドデザインかと錯覚させられるほど輝いて見えるから、アーラ不思議。

スカウトに声をかけられたのも、一度や二度じゃない。

正統派美少年……のハズなんだが、今はただのいじけ虫だ。
ぶっちゃけ、ウザい。

「だから、そういうのは心の中で言っつてよ。傷つくから」

「あらそー、ごめん遊ばせ？」

「全然悪いと思っつてないよね？」

「まあね」

あたしはヤスがみやげとして持っつてきたアイスクャンディをなめながら、適当に返事をした。

ちなみに味はバナナ。あたしの一番好きな味だ。

なんせ小学校からの付き合いだから、お互いの好みはだいたい把握しててる。

あたしとヤスとの関係を一言で言えば……なんだろう？

とりあえず最初は親分子分みたいな感じだったのかな。ヤスがあたしのことを『さん』付けで呼ぶのも、その影響だったりする。

この世の中つてのは不思議なもので、顔が良ければ必ずしも良いことばかりが起こるワケでもないらしい。

あたし、糸井睦いとむつは、そのことをこのヤスから学んだ。

どこに行っつても否が応でも注目的になっつて、道に落ちてるお金でも拾おうものなら、顔がイイクせに卑しいと後ろ指を指され、小テストでちよつとでも悪い点を取ろうものなら、顔はイイけど頭は空っぽという噂がマツハで広がるのだ。

特に男の美形は、同性の反感を買いやすいらしい。

それに子どももつて異質なモノを露骨に排除しようとするから、ヤスは小学校の頃、いじめられてたというか、仲間はずれにされてた。

これで聖人君子だつたり、孤高の存在になるだけの図太さを持っつていたり、世渡りの才能があればかなり違っつんだらうけど、生憎なことにヤスつて外見はトップレベルなクセに中身は極めて地味だ。カリスマ性なんて、かけらもありやしない。

当時の担任はクラスで浮いた存在になつてたヤスをかなり心配していた。そこでクラスのリーダー格だったあたしが、ヤスの面倒を見てくれるように頼まれたつてワケ。それ以来この八年間、あたしはヤスの相談役というか、お守役をしてる。

「ねえ、睦さん。俺はなんでこんな顔に生まれちゃつたんだろ。俺も睦さんみたいに平凡な顔に生まれたかつたなあ」

ヤスが人の顔を見て、ふざけたことを抜かしやがった。

「アンタね。それ、他の所で言つたら、確実にランチよ?」

内心かなりムカついたけど、本気で言つてるのを知つてるから、大きなため息だけで済ましてやる。ほら、あたしつて寛大だからね。

「今まで付き合つたコは、みんな俺の顔だけしか見ないで付き合おうつて言うんだ」

「で、付き合つてる内に、実はアンタがヘタレで地味くさいつてことに気づいて別れんのよねえ。お気の毒さま」

ヤスはひんやりとしたフローリングに体育座りしながら、まだグチグチ言つてるけど、あたしは毎度のことだからとおざなりに相槌を打つておいた。

やっぱりヤスと違う高校を選んで正解だったな。高校に入つてまで、コイツの面倒見きれるかつての。……結局フラれたり、なんかあつたりすると、ウチに来るんだけどさあ。

で、その時は毎回何かしらみやげを持つてくる。相談料のつもりらしい。それが夏だと、必ずあたしの好きなバナナ味のアイスクャンディなんだよね。

「睦さん、聴いてた? 俺の話」

「あー、聞いてた聞いてた」

「じゃあ、俺が何の話をしてたか言つてみてよ」

「あー、今日もいい天気だなあ」

「……聴いてなかつたね」

だってねえ、こんないいお天気で暑い日に、何が悲しゅうて野郎の愚痴なんか聞かなきゃなんないのさ。

全開にした窓から時折吹き込む風を感じながら、アイスクャンディをなめる。これこそ夏の正しい過ごし方ってモンでしょう。

「ねえ、睦さん。俺って女運がないんだと思う？」

諦めきつた表情で、あたしを見上げてくるヤス。

どうでもいいけど、男の上目遣いって微妙。

「アンタの場合はね、女運がないんじゃないかって、女を見る目がないんでしょ。告白されたからって、ホイホイ付き合ってるんじゃない？」

「だって、好きですって言われたら嬉しいよ？」

「あー。ホントに分かってないな。つーか、このダメ男め！」

「ヒドっ」

ヤスは傷ついたらって顔してるけど、毎度毎度同じ間違いをしてる学習能力のない馬鹿に同情してやるほど、あたしは甘くも優しくもない。

「つたく、ヤスの周りにいる人たちは、ヤスを甘やかし過ぎてんじゃないの？」

「……そういえば、ヤスの両親はふわふわしてる人たちだし、お姉さんもまたしかり。血と環境が揃ってんじゃない。そりゃ、こうなるわ。もう高校二年生なのにこんなので、コイツはどうやってこの先の人生を生きてくんだろ。」

顔がイイト、ちやほやされるからなあ。特に年上の女どもに。

行き着く先は、若いツバメかヒモ？　んー、そろそろ見捨て時かな？

「睦さん」

「何？」

「全部口に出てる」

「あらま」

家に居ると油断して、口から思考が垂れ流しになっちゃうんだよね。外じゃ気をつけてんだけど。危ない人になっちゃうからね。

「でもさあ、ホントにそろそろ自立してよ。あたしだっていつまでもアタの面倒見れるってわけじゃないんだしさ」

それにヤスと親しくしていると、コイツを好きな奴らに目の敵にされるんだよね。

中学まではあたしが先生に頼まれて面倒見てるのを皆知ってたから、そうでもなかったけど、今はそんなこと知らない奴らの方が多いし。最近、昼間でも一人で外を歩くと身の危険を感じる。なんか男の視線もあるっぽいけど。コイツの美貌は、男女問わず簡単に人を惑わせるらしい。

「今度こそ、見た目に惑わされるんじゃないやなくて、ちゃんとヤスのことと見てくれる人を探しなよ」

「……睦さん」

ヤスが膝立ちになって、あたしと目線を合わせた。ヤスは泣きそうな顔をしてる。あたしも顔をしかめた。

また余計なことを口に出して、ヤスを傷つけた？

「睦さん、睦さんが小学校の担任の先生に頼まれて、俺の面倒を見てくれたのは知ってる。それでも嬉しかったよ。ねえ、睦さん。

俺が睦さんの所に来たら迷惑かける？」

ヤスは迷子の子どものような、何かにすぎるような顔で言う。

あたしはその問いに答える代わりに、ずっと気になってたことを尋ねた。

「ねえ、ヤス。ヤスにとって、あたしって何？」

「え？」

ヤスがきよとした顔をした。

あー、それは考えたこともなかったって顔だね。

眉間にシワを寄せて、一生懸命考えてる。そして答えが出たのか、ぼつりとつぶやいた。

「お母さん？」

あたしは問答無用でヤスの整った顔を殴りつけた。ついでにソファ

から立ち上がって怒鳴りつける。

「あたしはアンタみたいな、でっかい子どもを産んだ覚えはない！」
「ヒドイよ！今のパンチ、ぐーだったよ、ぐー」

ヤスがほっぺたを押さえながら、尻餅をついてる。あたしはそれを仁王立ちで見下ろしながら、鼻を鳴らした。

「ふん、アンタはそんなんだから、長続きしないんだよ。デリカシ
ーないんだから」

「うつつ……あつ、睦さん、アイスクャンディが！」
目元に薄っすら涙を浮かべて落ち込んでたヤスが、目聡くあたしの持つてるアイスクャンディが溶けてることに気づいた。

いきなりアイスクャンディを持った右手を掴まれる。咄嗟のことで振り払うっていう選択肢は出てこなかった。

そして、あろうことか、ヤスは当の本人の了解も得ずに、あたしの指についた溶けたアイスクャンディをぺろりと舐めたのだ。

ちらりとのぞいた舌は、滑らかで扇情的な赤。

その舌が指を這う感触に、思わず声にならない悲鳴を上げてしまう。それに気付いたヤスは、見当違いなことで謝ってきた。

「あつ、ゴメン。べたべたするから、洗った方が良かったかな」

「~~~~っ、そうじゃなくて！」

叫びながら、自分の顔に血液が集まってくるのが分かる。

コイツ、本気で解ってないな！この天然スケコマシめ！

あたしはそんなことを今度はしっかり心の中で叫んで、呼吸を整える為大きく深呼吸をする。

「睦さん？」

ヤスがきよとした顔で、あたしの名を呼ぶ。けれどあたしはそれに応えられない。

動悸が治まらず、どくどくと自分の心音ばかりが大きく聞こえた。

ヤバイ。絶対にヤバイ。

コイツの容姿が特殊な嗜好を持ってない限り、かなり魅力的に映る

ことは知ってた。だからこんなことにならないように、細心の注意を払ってきたっていうのに。

冗談じゃない。この先も進んで苦勞する気なんて皆無だ。

静まれ動悸！ コイツは特に考えてやったワケじゃないんだ！
『たれたら床が汚れちゃう』くらの感覚でしかないんだから！ 大体コイツはあたしのこと、『お母さん』って言ったんだよ！ 落ち着け！ 早まつちやいけない！

あたしはもう一度大きく深呼吸してから、ヤスのことを殴り倒した。もちろん、体重を乗せた右ストレートで、だ。

「痛っ、何で殴るの!？」

「うるさい！ アンタが悪いのよ！ アンタが！」

「俺、なにもしてない！」

「うっさい！ 帰れ！ 二度と来るな！」

「ええっ、何で！ ヤダよ、睦さあん！」

残り一口になったアイスクャンディを口に放り込んで、ヤスを無理やり家から追い出す。

乱暴に玄関の扉を閉めて、しっかりカギとチェーンキーをかけた。

扉の向こうでヤスがまだ何かわめいてるけど、そんなことを気にしてる余裕なんてない。

扉に手をついたまま、ずるずるとその場に座りこんでしまった。

「マジでヤバイかも……」

鉄製の扉に体温を奪われた冷たい手を、自分の頬にあてる。頬はいつもよりも、熱を持ってる気がした。

名前をつけようもない関係に、終止符を打とうとしたのはあたし。

ヤスを見捨てようとしたのもあたし。あたしに頼ってすがりついて来たのは、ヤスの方だ。

でも……。

アイスクャンディ一本で囚われてしまったのは、もしかしたら、あ

たしの方だったのかもしれない。

今、一番近くにいる君に

暑い。

そりゃ今は夏だから、暑いのは当たり前だ。

でも、俺は暑い日があまり好きじゃない。

だって、ただでさえ面倒くさがりな睦むつさんが、もっと面倒くさがって、

俺の話聞いてくれなくなるから。

ねえ、睦さん。俺はここにいますよ。

ずっと、そばにいたよ。

俺、新庄泰伸しんじょうたいすけは今、睦さんこと、糸井睦いといむつの家にいる。

睦さん家のリビングは、観葉植物や睦さんのお母さんの和歌わかさんが、趣味で作った刺繍なんか飾ってあって、とても居心地がいい。

もっとも、睦さんの側だったら、どこにいても落ち着くんだけど。

睦さんは糸井夫妻が新婚旅行で一目ぼれしたという、糸井家自慢のイタリア製ソファにふんぞり返って、俺がおみやげに持って来たアイスクャンディを舐めてる。

俺はその足元のフロアリングに直に座って、今日来た理由を説明する。

ここは俺の糸井家における定位置だ。

「で、希美ちゃんが『どんなゲームが好き？』って訊くから、俺は『ゲーセンのコインゲーム。あの上からコインを入れて、上手くたくさんのコインを落とすヤツ』って言ったんだ。そしたら『なんていうか、イメージと違うんだよね。地味っていうか。別れよっか』って……」

希美ちゃんはずい昨日別れたばかりの元カノだ。

ふわふわしたはちみつ色の髪が印象的で、いわゆるギャル系のコ。

ゲーセンで出会って、向こうから告白されて、OKして、二週間で

別れた。

何がいけなかったのか、実はよく分からない。

でも二週間っていうのは、最短新記録だ。

今までの最短記録は二週間と二日だったから、二日更新したことになる。

ちなみに最長記録は半年。

高校入ってすぐくらいに、隣のクラスの品川さんと付き合い始めて秋頃に別れたから、多分そのくらい。

これもイマイチ原因が分からない。

佐奈ちゃん、じゃなかった。もう名前で呼ばないでって言われてたんだっけ。

品川さんは大人しそうだけど、芯が強くて優しい上に、はにかんだ笑顔が可愛かった。

そういえば、品川さんも希美ちゃんと同じようなこと言ってたよな……。

確か、品川さんの家族が皆お出かけだからって、泊まりに行った時のことだ。

もちろん俺も健全な男子高校生だから、泊りの目的は言わずもがななんだけど、その行為の後、品川さんお手製の夕飯をご馳走になった。

品川さんの作った料理は、さすが料理部所属なことだけあって、とても美味しかった。

あと、おばあちゃんが漬けたっていう、きゅうりの糠漬け。

あれは絶品だった。ついつい食べ過ぎちゃったくらい。

俺、漬物って結構好きなんだよね。

そして漬物を頼張ってた俺に、品川さんが言った。

『え、漬物好きなの？ ……なんていうか、イメージと違うね』

その泊まりの日から三日後、品川さんの方から別れてくれて言われたんだ。

「イメージが違っつて、どういう意味なのかなあ？」

俺は睦さんを見上げて尋ねた。

けど、睦さんはぼーっとアイスクャンディを舐めたまま、ぶつぶつ呟いてる。

睦さんは家にいると、思考が垂れ流しになってしまっらしい。

早口で小さな声だけど、蝉の声も止んでる今は静かだから、聞こえないこともない。

“なんでこんな暑い日に他人の相談に乗ってんだろ。あーあ面倒くさい”

ひ、ヒドイ。絶対俺の話、聞いてなかった。しかもハッキリ面倒くさいって……。

「そういうことは、お願いだから心の中で言っつてよ、睦さん」

落ち込んでる俺に追い討ちをかけるかのように、睦さんは片方の眉だけ器用に上げて言う。

「なに言っつてんだか。別れたからって、毎度毎度人どこに来ないでよね。モテ男のクセに」

ついでに頭を叩かれた。

ソファに座つた睦さんの足元に座つてる俺の頭は、身長差と相まっつてちょうど叩きやすい位置にあるらしい。

でも音はいいけど、全然痛くない。

だから別に叩かれても、ムカついたりはしない。

それになんだかんだ言っつて、睦さんは俺がこうやっつて別れたり、なんかあつたりする度に家に来ても、迎え入れてくれる。

時々口悪いし、ちよつと暴力的で、心の中ではキツイことも言っつけど、本当は優しい人なんだ。

“正統派美少年のハズなんだけど、今はただのいじけ虫なんだよね。ぶつちやけウザいし”

……本当は……優しい人……の……ハズ……。

どうしよう、自信なくなつてきた……。

「だから、そういうのは心の中で言っつてよ。傷つくから」

仲良くできると思うんだ。頼む、糸井。この通りだ』

『……分かりました。いいですよ』

俺は放課後、忘れ物に気づいて戻った教室で、この会話を偶然立ち聞きしてしまった。

九歳の子どもに手を合わせて頭を下げた先生を、冷ややかな目で見下ろしてた睦さんが、何を考えて承諾したのかは、未だに謎のままだ。

でもそれ以来この八年間、俺は睦さんにとってもお世話になってる。それだけは、確かな事実だった。

俺は睦さんの顔をじっと見つめる。

人は俺の顔のことを羨ましいって言うけど、俺はこの顔で生まれて得しと思ったことは、一度もない。

どこに行っても注目されるし、じろじろと顔を見られるのって、ハッキリ言って不愉快だ。

ちっちゃい頃は変なおツサンや怪しいオバサンが『向こうでお菓子を買ってあげようか』とか言って近寄って来たり、誘拐されかけたことだって一度や二度じゃない。

割とでかくなつてからは、あれだけ俺のこと敬遠してた同世代もなぜか馴れ馴れしく近寄って来るし、時々野郎の熱っぽい視線まで感じて、全身に鳥肌が立つ。

俺は同性にはこれっぽっちもそういう興味はないっていうのに。

「ねえ、睦さん。俺はなんでこんな顔に生まれちゃったんだろ。俺も睦さんみたいな平凡な顔に生まれなかったなあ」

睦さんの顔って、一見平凡なんだけど、よく見ると結構整ってるんだよね。

ダークブラウンの髪はショートカットなのが惜しいくらいに綺麗だ。切れ長の目は知的な感じがするし、よく見ると結構まつげも長い。

前にそう言ったら『マスカラって知ってる？』ってあきれられたけど。

でも化粧し始める前の睦さんの顔も知ってるけど、やっぱり睦さんの顔って、こう、相手に好印象っていうか、安心感を与える顔だと思うんだよね。

いいなあ。羨ましい。

俺は心からそう思うんだけど、睦さんは大きなため息をつく。

「アンタね。それ、他の所で言ったら、確実にリンチよ?」

うーん、確かに不遜に聞こえるのかな。

でも、俺にはこの顔が邪魔なんだよ。

贅沢な悩みだって、睦さん以外には怒られそうだけど。

だってさ……。

「今まで付き合ったコは、みんな俺の顔だけしか見ないで付き合おうって言うんだ」

「で、付き合ってる内に、実はアンタがヘタレで地味くさいってことに気づいて別れんのよねえ。お気の毒さま」

そう言って、睦さんは笑った。

んー、やっぱりそうなのかな。イメージと違うって、そういう意味なのかな。

やっぱりヤダなあ、この顔。弊害あり過ぎんだよね。

「はあ、どうしたらいいと思う?」

ちらりと睦さんの方を見ると、またぼーっとアイスクャンディを舐めてる。

その視線は俺の方じゃなくて、窓の外に向けられてた。

「睦さん、聴いてた? 俺の話」

「あー、聞いてた聞いてた」

睦さんは窓の外を見たまま、適当な返事を返してくる。

嘘だ。これは絶対に聴いてなかった。

「じゃあ、俺が何の話をしてたか言ってみてよ」
「言えるもんならね。」

案の定、睦さんは不自然な間を空けて、わざとらしい上に古典的な

ごまかし方をした。

「あー、今日もいい天気だなあ」

「……聞いてなかったね」

やっぱり。俺は確信を込めてつぶやいた。

睦さん、最近冷たいんだよ。

いくら夏で暑いからって、こんなに俺の話を聞いてくれないなんて、どうしたんだろ。

それにしても、最近の俺ってば、ついてないのかなあ。

「ねえ、睦さん。俺って女運がないんだと思う？」

思い切って、尋ねてみる。

睦さんは微妙に眉間にシワを寄せて言った。

「アンタの場合はね、女運がないんじゃないかって、女を見る目がないんでしょ。告白されたからって、ホイホイ付き合ってるんじゃないやねえ」

う、さすが睦さん。痛い所をついてくる。
でも、一応反論する。俺にだって、言い分はあるんだよ？ ……一応。

「だって、好きですって言われたら嬉しいよ？」

試しに付き合ってから、芽生える恋だってあるかも知れないし。もしかしたら、だけど。

睦さんは、俺のそんな弱々しい反論を、ばつさりと切り捨てた。

「あー。ホントに分かってないな。つーか、このダメ男め！」

「ヒドっ」

ダメ男って、そんな……。

ガツクリと落ち込んでる俺の耳に、また睦さんの独り言が聞こえてきた。

「コイツってば、こんなんでどうやってこの先、生きてくんのだろ。

まあ、顔はイイからなあ。行き着く先は、若いツバメかヒモ？」

ここまででは、いつもの睦さんでも、考えるだろう。

でも、この次に続いた言葉に、俺はものすごくショックを受けた。

“んー、そろそろ見捨て時かな？”

「睦さん」

睦さんに呼びかける声も、弱々しくなる。

それでも睦さんの耳には届いたようで、短い返事が返ってきた。

「何？」

「全部口に出てる」

「あらま」

睦さんは『またか』って顔をして、ペロりとアイスキャンディを舐めた。

多分、何気なくそう思ったんだらうけど、俺にとっては、とても重い一言だった。

まだ頭の中でリフレインしてる。

どうしよう、俺、見捨てられちゃうの!?

オロオロしてる俺に追い討ちをかけるかのように、睦さんは困った顔で言った。

「でもさあ、ホントにそろそろ自立してよ。あたしだっていつまでもアンタの面倒見れるってワケじゃないんだしさ」

”最近、昼間でも道を歩いてると、身の危険を感じるんだよね。コイツの美貌って、男も女も簡単に惑わせるらしいし“

え……。睦さん？　もしかして俺のせいでは……？

「今度こそ、見た目に惑わされるんじゃないやなくて、ちゃんとヤスのことと見てくれる人を探しなよ」

そ、そんな……。

睦さんに見捨てられるのはヤダけど、俺のせいで睦さんに迷惑をかけるのは、もっとヤダ。

それにそんな人、家族と睦さんくらいしか、まだ出会ってないのに。

「……睦さん」

俺は膝立ちになって、睦さんと視線を合わせる。

睦さんのダークブラウンの瞳が揺れた。

そして顔をしかめて『しまった』という表情になる。

俺は言葉を選びながら、ゆっくり話しかけた。

「睦さん、睦さんが小学校の担任の先生に頼まれて、俺の面倒を見てくれてたのは知ってる。それでも嬉しかったよ。ねえ、睦さん。俺が睦さんの所に来たら迷惑かける？」

睦さんはその質問に答えなかった。

多分、それは睦さんが優しいから、本当に傷つけるような言葉は、絶対言わないって誓ってるからだと思う。

その代わりに、睦さんはいきなりこんなことを訊いてきた。

「ねえ、ヤス。ヤスにとって、あたしって何？」

「え？」

考えたこともなかった質問に、俺は悩んだ。だって睦さんは睦さんだし。

睦さんの側は居心地がよくて、とても落ち着く。

例えるなら、大きくて立派な樹の下で寝っ転がってるみたいない感じ？でも、もつと的確な言葉があるんじゃないかな。

親分？ 小学校の頃ならまだしも、今は違うよなあ。

んーんー、保護者みたいな……そうだ！

「お母さん？」

そう言ったら、問答無用で殴られた。俺は殴られた衝撃で、尻餅をつく。

睦さんが立ち上がって、鬼のような形相で怒鳴った。

「あたしはアンタみたいないな、でかい子どもを産んだ覚えはない！」

「ヒドイよ！ 今のパンチ、ぐーだったよ、ぐー」

しかも顔だよ！ ためらいも遠慮もなく殴ったでしょ！

ホントに今のは痛かった。

涙がすこーしだけ出たし。

睦さんはそんな俺を仁王立ちで見下ろしながら言った。

「ふん、アンタはそんなんだから、長続きしないんだよ。デリカシイないんだから」

「うつつ……あつ、睦さん、アイスキャンデーが！」
アイスキャンデーが溶けて、睦さんの手を汚しているのに気づいた俺は、咄嗟に立ち上がって、睦さんの右手を掴んだ。
そして、そのまま吸い寄せられるように、睦さんの手についたアイスキャンデーをぺろりと舐めた。

この時、何でこんな行動をとったのか。
それは覚えてないし、後から考えても、全然解らなかった。
ただ、睦さんの手首が思ったより細くて柔らかかったことと、舐めたアイスキャンデーがやたらに甘かったことだけは、鮮明に覚えている。

睦さんの身体がびくりと震えた。

「あつ、ゴメン。べたべたするから、洗った方が良かったかな」
舐めたら、余計べたべたするよね。

あれ？　なんで俺、舐めたんだろ？

「~~~~つ、そうじゃなくて！」

睦さんが顔を真っ赤にしながら叫んだ。

「睦さん？」

名前を呼んでも、睦さんは応えてくれなかった。

ヤバッ、何でかは知らないけど、俺、そんなに怒らせちゃった？

俺は何度か大きな深呼吸を繰り返した睦さんに殴り倒された。

しかも、体重を乗せた右ストレートで、だ。

「痛っ、何で殴るの!？」

「うるさい！　アンタが悪いのよ！　アンタが！」

「俺、なにもしてない！」

「うっさい！　帰れ！　二度と来るな！」

「ええっ、何で！　ヤダよ！　睦さあん！」

背中をぐいぐい押されて、家から追い出された。

乱暴に閉められた扉。

カギとチェーンキーをかける無情な音が響いた。

「睦さん！？ 何か気に障ることがあったら謝るから！ ねえ、開けてよ！ 理由も分からないんじゃない、納得できない！」
近所迷惑になるかもだけど、俺はそんなことを気にしてる余裕なんてなかった。

必死で睦さんに呼びかける。

「睦さん！ お願いだから、ここ開けて！ 睦さん！」

睦さんに殴られた左頬が、じんじん痛む。

けど、睦さんに見捨てられるって恐怖心の方が大きくて、全然気にならなかった。

ちっちゃい頃、悪いことをして外に出されたことがあった。

その時もちよつと不安になったけど、今日はその比じゃない。

この扉の向こうに、睦さんがいるのが、気配と物音で分かる。

たった一枚の鉄の扉が、とてつもなく厚く思えた。

なんで、こんなにすぐ近くにいるのに……。

俺はその場に座り込んで、頭を抱えた。

なんで睦さんに見捨てられるのが、こんなに恐いのか。

なんで睦さんの指を、咄嗟に舐めてしまったのか。

なんで睦さんは扉の向こうから、動こうとしないのか。

俺はこの時、小学生の時からまったたく進歩してないガキでしかなくて、どう考えても解らなかった。

正直言つて、睦さんが同い年のオンナノコだつてことも、忘れてたくらいだ。

睦さんはいつも俺の面倒を見てくれる、とても大きな存在だったから。

ただ、柔らかい手首の感触と甘い匂いだけが、頭から離れなかった。

自分の愚かさと本当の気持ちにやっと気づくのは、もう少し、先の

贈り物はマフラー 1・5 m

自分の気持ちにフタをしよう。

まだ、早い。きつとこの感情は早過ぎる。

まだ、しばらくはこのままで。

気付かないフリをして、今まで通り、居られればいい。

家庭科でマフラーを編むことになった。

あたしは編み物ってかぎ編みしかやったことなかったから、はつきり言っただけと憂鬱だった。

確かにセーターとか帽子とかよりも簡単そうだけど、初心者同然のあたしには、だいぶハードルが高い。

だいたい、編み物自体が初めてって人は、男子にも女子にも結構いるんだよね。

それなのにいきなり棒編みって、先生もチャレンジヤーだ。

だけど幸いなことに、クラスに編み物が得意ってコが何人かいて、先生とそのコたちがそれぞれのグループに教えることになった。

同じグループになった経験者のカトちゃんに基本的な編み方を教わって、あたしも初めての棒編みにチャレンジしたんだ。

うん、ここまではいい。

基本的な編み方は、基本的というだけあって、簡単だった。

問題はこのマフラーが、どうしても丸まってしまうことだ。

きつく編み過ぎたのかなと思って編み直しても、すぐに“くるん”としてしまう。

その原因をカトちゃんに訊こうにも、カトちゃんは円香まゆかにかかりつきりだった。

円香はあたしの友達で、小動物みたいでカワイイんだけど、超のつくぶきつちよだ。

あのコが作ったっていうマスケットを見せてもらったことがあるん

だけど、まあ……なかなか前衛的だった。

本人はウサギのつもりらしけど、あたしは耳が三つもあるウサギは、あいにく知らないんだよね。

そんな円香がいるグループになるなんて、カトちゃんもツイてないな、なんて他人事みたいに思ってたいられたのも、最初だけだった。

カトちゃんは円香にマンツーマンで教えてるし、他のメンバーも、まったくの初心者男子二人。

この中ではカトちゃんに次いで編み物経験があるのが、なんと編み物キットで“エコたわし”を作ったことがあるだけの、あたしだったりする。

他のグループのコモ先生もそれぞれ大変そうで、マフラーがどうしても丸まるんですけど、なーんてマヌケな質問が出来そうな雰囲気じゃない。

マフラーの提出日は十二月の最後から二番目の授業。

どうしよう、このままのペースでいくと、確実に間に合いそうになり……、んだけど、実は心当たりが一人だけいる。

外で遊ぶことが苦手なせいで、編み物や縫い物なんか得意になっちゃったヤツがね。

もう、ヤツに頼むしか、道はないか……。

「というワケで、あたしに編み物教えてちょうだい」

土曜日の昼過ぎ、あたしは新庄家の玄関にいた。

チャイムを鳴らすと、案の定ヤスが出てきたんで、挨拶代わりに言ったのがさっきのセリフってワケ。

「アンタ、編み物とか縫い物とか、細かいこと得意でしょ？」

あたしは手に持っていた紙袋をヤスに押し付けながら言った。

ヤスは紙袋を両手で受け取って、目をぱちくりする。

「何かよく分かんないけど、とりあえず上がってよ、睦さん」

ヤスはいきなり押しかけて来たあたしに文句を言うでもなく、にっこりと笑った。

白いVネックのセーターにジーンズっていうラフな格好なのに、ヤスが着るとファッション雑誌から抜け出てきたみたいだから、ホントに不思議だ。

って、ダメだ。ヤスが輝いて見える……。

ゴトリと何かが動きそうになったあたしは、さり気なくヤスから目をそらす。

そして目に入ったのは、和紙で出来た人形だった。

下駄箱の上にはずらりと並んだ人形たちは、単体で見れば可愛いんだけど、

こつもたくさんあると、ちよつと怖い。

「これ、春ばあちゃんに興味で作ったヤツでしょ？ また増えてない？」

「ああ、でも、今お祖母ちゃんの趣味は、家庭菜園だよ。睦さんが前にウチへ来たの、だいぶ前だったよね。だから、そう感じるんじゃないかなあ」

ヤスはスリッパを出しながら、なにげなく答えた。

そう、ヤスがウチに来ることはしよつちゅうだけど、あたしがヤスの家に来るのは、中学校を卒業して以来かもしれない。

板張りの廊下をヤスの後について歩きながら、ぼんやりとそんなことを思い出した。

ヤスの家は立派な日本家屋で、ほとんどの部屋が和室だ。

西洋の血が混じっていそうな外見のクセに、家は純和風。

つくづく外見と中身のギャップが激しいヤツだ。

「睦さん、もうそれはいいから……」

あたしの前を歩くヤスが、肩を落として情けない声を出した。

「……また垂れ流してた？」

「うん。外見と中身のギャップが著しいって」

「あー、ゴメン。気をつけてるんだけどね」

ぺちりと、自分の額を叩いて、ため息をつく。

これがあたしの困ったクセなんだ。

ウチとヤスの家では思考が垂れ流しになっちゃうんだよね。ま、外じゃやらないけど。やったら、ただの危ない人だ。

パタパタと廊下を少し行った所で、ヤスがいきなり立ち止まって、「あ」という声をもらした。

あたしはその背中にぶつかりそうになつて、悪態をついた。

「いきなり立ち止ままないでよ、危ないなあ」

「あ、ゴメン。今思い出したんだけど、今日姉さんが友達と居間で勉強会してるんだ。そろそろテストだからって」

「美菜子ちゃんか？」

あたしは『テスト』という単語を用心深く頭から弾き出して、ヤスの年子のお姉さんの名前を言った。

美菜子ちゃんは外見も雰囲気もふわふわして可愛らしくて、あたしがもし男だったら、絶対に弟の友人って特権をフル活用して落とすだろうって感じの人だ。

久しぶりに会えることを楽しみにしてたんだけど、お友達と一緒に挨拶も止めといたほうが無難かなあ。

ん？ ちょっと待て。

と、あたしは大分それた思考の軌道修正にかかった。居間が使えないってことは……。

あたしが自分の目線より少し高い位置にある顔を見上げると、ヤスはちょっと濟まなそうな顔をして言った。

「俺の部屋でもいい？」

一瞬、心臓がはねた……ような気がしたけれど、たぶん顔のすぐ側を横切つていった虫のせいだろう。

結構デカくてびっくりした。

居間がダメだからヤスの部屋っていうのは、別に変な話なんかじゃない。

いたって普通の思考回路だ。

だいたい、あたしとヤスは小学校からの付き合いだし、ヤスに他意なんてあるはずがない。

なにせ、“お母さん”だ。

警戒するのも馬鹿馬鹿しい。

あたしは了承の意味で頷いた。

「オツケ、分かった」

「それじゃ、先に行つてよ。お茶いれてくから」

「うん。あ、その紙袋の底の方に、苺大福が入ってるよ」

一応、授業料のつもりで家にあつたヤツを持って来た。

確か、一昨日くらいに父さんがもらつて来たヤツだ。

ウチの家族はあたしを除いて、苺大福はあんまり好きじゃないんだよねえ。おいしいのに。

「ホント？ わざわざ有難う、睦さん」

いいつてことよ、タダだしね、つてという言葉は、紙袋をのぞいているヤスの顔を見て引つ込んだ。

代わりに出てきたのは、どうにも歯切れの悪い言葉だった。

「あー、いや、そのう、どういたしまして？」

ヤスがあまりに嬉しそうに笑うもんだから、あたしは苺大福が家にあつた余りモンだつてことを、とうとう言えず、笑つてごまかしたのだった。

勝手知つたるなんとやら。

あたしはだいぶ前に来た時の記憶を引つ張り出しながら、一つのふすまの前で立ち止まった。

確か、ここだつた気がする……。

一瞬、間違つてたらどうしようと思つたけど、たとえ間違つてたとしても、真つ昼間から見られちゃ困るようなものは、新庄家に限つてはないだろう。

もしあるとすれば、春ばあちゃんがハマってたブツの残骸くらいなものだ。

そう結論付けて気軽にふすまを開けると、はたしてそこはヤスの部屋だった。

八畳くらいの部屋の真ん中にはこたつがどーんと置いてあった。

勉強机に漫画と小説が入り混じった本棚、その上のコンポと、物が少ないのは、アイツの変に几帳面な性格のせいかな。

この分じゃ、押入れの中も片付いてるんだらう。ヤスのことだからウチの愚弟にも見習わせたいね。

ヤスの部屋は、全体的にシンプルっていうか……こう言っちゃあなんだけど、地味な部屋だ。

まあ、ヤスらしいけど。

寒かったから、勝手にこたつのスイッチを入れて暖まる。

最近のこたつって、すぐ暖かくなるのねー。と、ぬくぬく暖まっていると、廊下からヤスの声が聞こえた。

「睦さん。手え、ふさがってるから開けてー」

「はいはい」

あたしは横着して、こたつに入ったまま寝転がって手を伸ばした。なんとか指の先をひっかけて、ふすまを開ける。

「睦さん？」

ヤスは視界にあたしの姿が見えなかったことに驚いたみたいだった。目線を下げて寝転がったあたしを見つけると、ホントに不思議そうな顔をして首を傾げた。

「何してるの？」

「だって、寒いしねえ」

「そりゃ、冬だし」

ヤスは、よく分からないって顔をしたままだった。

ヤスには横着しようなんて発想自体ないんだらう。千夏さん（ヤスのお母さんだ）の教育の賜物だ。

あたしは笑いながら身体を起こして、バッグの中から袋を取り出した。

「メリヤス編みだね」

あたしが編んだマフラー（のつもりのブツ）を見せると、ヤスは開

口一番にそう言った。

「メリヤス編み？」

「そう。編んだのを見ると、表と裏が出来てるでしょう？
この編み方だと、どうしても丸まっちゃうんだよ」

「……マジで？」

「うん、マジで」

あたしは思わず、こたつに突っ伏した。

あたしの編み方がおかしいんじゃないかって、ずっと悩んでたのに、
実は編み方の特性だっていうんだから、ホント嫌になるよ。

突っ伏したままブツブツ言っていると、向かい側に座ったヤスの少し
焦ったような声が聞こえた。

「あ、でもスチームアイロンをあてれば、まっすぐになるよ」

「ホント？」

顔を上げて尋ねたあたしに、ヤスが曖昧に頷く。

「まあ、洗ったりしたらまた丸まっちゃうんだけど」

「それじゃ、意味ないじゃん」

あたしは頬杖をついて、ヤスをにらむ。

別にヤスがマフラーを丸まらせてるワケじゃないけど、ちょっと八
つ当たりでもしないとやってらんない気分だ。

一瞬、ヤスは考え込むような顔をして、恐る恐るこんな提案をして
きた。

「うーん、もし睦さんがよければだけど、別の編み方試してみない
？」

「別のつて？」

「簡単なのはガーター編みとかゴム編みかな。ああ、でも睦さんは
表編みも裏編みも出来るんだよね？」

「さんざん、メリヤス編みとかいろいろの編んでたからね」

そりゃあ何度も編みなおしたさ。丸まる原因が分からなくてね……。

「じゃあ、ゴム編み……二目ゴム編みにしようか」

ヤスはそう言うと、勉強机の陰から毛糸やら棒針やらが入ったカゴ

を持って来て、目の前であつという間に数段編んでみせた。と言つても、見本だから目数は少ないけど。

「ゴム編みっていうのは、表編みと裏編みを繰り返して編むんだよ。二目ゴム編みは、二目表編みで編んだら、また二目裏編み」

ヤスが見本で編んだヤツを渡してきた。

目がキレイに揃つてて、素人目にも上手いと思う。

これを認めるのは何だかしゃくなんだけど、実は男の方が器用なんじゃないかって、時々思うんだよね。

この間、ウチの愚弟が家庭科で作ってきたティッシュケースカバーは、ミシンの縫い目がちゃんと真つ直ぐで、現在台所で活躍中だったりするし。

これであたしがすぐ丸まっちゃうような、無様なマフラーを提出したなんて知られたら、ヤツは大声で笑うに違いない。

……中二男子に負けるのはシャクだな。

あたしは姿勢を正して、ヤスの顔をまっすぐ見ながら言った。

「ね、提出に間に合う？　今からやり直してさ」

「提出期限まで、あと三週間でしょう？　大丈夫。睦さんなら出来るよ」

ヤスに励まされたあたしは、マフラーに向かないという（基礎って言っちゃあ基礎らしいんだけど）メリヤス編みから、見た目がキレイで丸まらない（ココ重要）ゴム編みに乗り換えることにした。せつかく教えてくれたのに、ゴメンね、カトちゃん。

ヤスに教わつて、二目ゴム編みとかいう編み方で編み始める。

作り目作つて、表表表、裏裏、表表、また裏裏、またまた表表……。編み物つて単調だけど、目をとばさないように集中しないといけない作業だ。

数段編んだ後に気づくと、実に悲惨なことになる。

ヤスは時々あたしの進み具合を聞きながら、自分のを編んでる。

ヤスのもマフラーだけど、あたしが編んでるのよりはだいぶ模様が

複雑そうだし、暖色系の毛糸を使ったマフラーは、完成間近らしくてだいぶ長かった。

あたしの白一色の短いマフラーとは、大違いだ。

「そういえば、なんで最後から二番目の授業が提出日なの？」

ふと、ヤスがそんなことを訊いてきた。

あたしは自分の手元から目を離さずに答える。

「ああ、十二月最後の授業で返却するからだって。そうすれば、クリスマスプレゼントに出来るでしょ？ 塩原センセイって、結構口マンチストなんだよねえ」

塩原センセイ……通称塩センは、五十代のおばちゃん先生なんだけど、発想がだいぶ乙女で、影じゃ“メルヘン”ってあだ名で呼ばれてるくらいだ。

「ふうん、睦さんは、誰かあげる相手いるの？」

「悪かったな。自分のだよ」

ヤスのなにげない問いに、あたしは超低音で返して、にらみつけた。それで怯むかと思ったら、ヤスは意外にもなにか考えているような顔をした。

そして、ぱつと、いいことを思いついた子どもみたいな顔で言う。

「ね、睦さん」

「何？」

「これもうすぐ出来るんだけど」

「だから？」

要点を言え、要点を。

「うん、だから俺のと睦さんの、交換しない？」

「はあ？」

あたしは驚いて、編んでいたマフラーを落とした。

ヤスがにこにこ笑いながら、続ける。

「俺ね、睦さん用にマフラー編んでるんだ。

去年はカーディガンあげたし、一昨年は手袋で、マフラーあげたのって、だいぶ前だったでしょう？」

「え、ああ、うん」
すっかり忘れていたんだけど、ヤスは冬になると、毎年何かしら編んでくれる。

小学生の頃は、女の子にあげるのとはどうかと思う、腹巻きとかくれたっけ。

「俺のマフラーがあれば、それは使わないよね？」

「いや、使うよ。洋服に合わせて変えたりするよ」

「ええ〜っ、くれないの？」

情けない声を上げて落胆したヤスは、ガツクリと肩を落とした。

それがあまりに可哀相で、あたしは思わず言ってしまったのだ。

「わ、わかったってば、あげるよ。あげればいいんでしょ！」

「本当に？」

「言っとくけど、完成度は保障できないよ」

「全然大丈夫だよ。ありがとう、睦さん」

ヤスが本当に嬉しそうに、にっこりと笑う。

だから、その笑顔は反則だっけ！

あたしはその笑顔にあてられて、顔が熱くなる。

それを悟られないように、マフラーを編むのに集中してるフリをした。

目だけを動かして、チラリとヤスの方を盗み見る。

あたしとは違う、筋張った大きな手。

その手に持った棒針が器用に動いて、糸をすくう。

それが妙に艶かしく見えるのは、あたしの気持ちの問題なんだろうか……。

ゴトリ、と、フタが動いて中身が溢れそうになる。

ホントは知ってるんだ。気持ちにフタなんて、簡単には出来やしない。

それでも、面倒ごとは嫌いだし、怖いものも嫌いだ。

だって、ヤスがあたしのことをどう思ってるかなんて、今更訊くま

でもないでしょ。

っていうか、夏ごろ聞いたんだっけ。

同い年の女子に向かって、「お母さん」って言いやがったんだよ、ヤツは。

なのに……。

たぶん、このフタが開いてしまったら、あたしは、こうして一緒になんていられないだろう。

最近はどうやら彼女がいらないらしいけど、去年とか一昨年のクリスマス前後には、彼女さんがいたと思う。

あたしの他にも、ヤスが編んだヤツをもらったひとがいるんだろうか。

そう思うと、もやもやしたものが広がった。

去年カーディガンもらった時も、一昨年手袋もらった時もこんなこと、気にしてなかったのに……。

「出来た！」

その声に、はっと顔を上げると、ヤスはにっこり笑いながら言った。

「クリスマスにはちよつと早いけど、今日あげるね。睦さん、寒いのにマフラーして来なかったでしょう？」

そしてヤスは、こたつの上に体を乗り出して、あたしの首にふわりとマフラーを巻いてきた。

あたしは、その間、大人しくされるがままになっていた。

というか、指一本も動かせられなかったし、単語ひとつも言えなかったのだ。

オレンジと黄色と赤が混じったマフラーは、綺麗で、暖かくて、優しく、少し、泣きそうになった。

ヤスはずっと変らなくて、あたしにマフラーを編んでくれるけど、このままでいたら、いつか編んでもらえない日が来るんだろう。

この暖かさを、他の誰かが持って行ってしまふ日が、きつと来てしまふんだろう。

それは嫌だと思った。

他の誰かがヤスの編んだものを身につけてるなんて、絶対に嫌だと思っただ。

そして、フタは砕け散ったのだ。

たった1.5メートルのマフラーが、あたしが必死で閉じようとしてたフタを、粉々に砕いてしまった。

一度なくなったフタは、二度と戻らないし、あふれた感情は、なかったことには出来ない。

気付かないフリは、もうおしまいだ。

だって、あたしは認めてしまったんだ。

暖かいマフラーに顔を埋めて、その感情を確かめた。

あたしは、ヤスのことが好きなんだ、と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9855b/>

ふたりの距離

2010年10月11日23時27分発行